

# 校長通信 調和

発行  
校長 寺島克彦  
〒384-0023  
小諸市東雲4-1-1  
TEL 0267-22-0216

題字 渡邊虚舟

## 終業式&始業式(校長講話要約版)

### 本年度も小諸高校生が輝く年となりますように！



### 【平成 29 年度・終業式】

小諸高校生の「カッコイイ姿」について、日本の数学者で大学教授の秋山仁（あきやまじん）先生が信濃毎日新聞に書かれているコラムから引用させていただいて、考えてみたいと思います。

「本当のプロフェッショナルとは、その分野のことしか分からない人のことではなくて、その仕事を通じてトータルに人間を感じさせる人のこと」と歌手の加藤登紀子さんは言っていたとのこと。秋山先生は、平昌オリンピックを見て、特に、そのプロフェッショナルさを感じたのは、小平奈緒選手だ（茅野市出身・相沢病院）と書いています。

小平選手は金メダルを取った直後の取材で「自分が目指していることは、実力を可能な限り高め続け、それをレースで最大限発揮して最高のパフォーマンスをすること。他人との戦いではなく、自分との戦いです。スケートが好き。学びは楽しい。いくらでも滑っていられます」述べていたとのこと。

別のインタビューでは「誰かに勝つというのは、(相手に)お願いだから遅く滑ってとは言えないし、自分でコントロールできない。だからそれは余分なこと。自分が強くなれば相手より速い。その方がタイムももっと先の方までいけると思う」と話しています。

そんな小平さんのはなしから、秋山先生はこう書いています。「才能とは、それに取り組むことを勉強とか努力に感じず、夢中になって取り組み、やり続けられるくらい好きだということだ」

「他人と比較して出来るから」だけでは努力はできません。「好き」であるからこそ、はたから見たらとても大変な努力もし続けられるのではないのでしょうか。

また、反対に考えてみましょう。皆さんは「これは不得意」「このことについては、私は才能無し」と思うことはあるのでしょうか。

ハーバード大学での「人生を変える授業」として人気の、タル・ベン・シャッター氏はその授業で、「自分への偏見を破る」として、「幼いころに誰かが言ったことや自分が思ったことで、自分の能力や技術を低く見てしまうようになった経験はないか考えて、書き出してみよう。



そして、その理由が合理的なものか考えてみましょう」と提案し、実業家の言葉をあげています。

「あなたは、自ら受け入れて、行動の規範としている情報を体現しているだけだ。取り巻く状況を変えるには、考え方とそれに基づく行動を変えなければならない」

【国際ロボチニスト小諸主催「夢を拓くフォーラム」参加の本校生徒と会員の皆さん】

皆さんが不得意と思っていることは本当に皆さんにとって不得意なものなのでしょうか。何かをきっかけに、誰かの言葉を、或いは自分の思い込みや勘違いで、そう決めてしまって、努力していないだけではないでしょうか。

人は努力して出来たことの方が、幸福度を感じるようですし、努力して会得したことが「好き」につながるようです。

優勝したい。全国大会に行きたい。それも、目標としては良いかもしれませんが、目的にはなりません。皆さんが高校卒業後も活躍できる人として成長することが目的であり、そうしたいのであれば、他人との比較ではなく、良いものを作ることが出来るように、最高のプレーが出来るように、自身を高めることが出来るように、学び、努力することが大事なのではないのでしょうか。

また、そんな努力をし続ける人を私たちは「カッコイイ！」と感じていると思います。

4月から益々「カッコイイ小諸高校生の姿」を沢山見せてくれることを期待しています。



## 【平成 30 年度・始業式】

さて、終業式でお話した皆さんの、好きなこととの出会いはあったでしょうか。これから、努力することは決まったでしょうか。

平成三十年度の始業に当たり、皆さんが、これから一流に向かって進んでいくために、「身に着けてほしいこと、三つ」をお話したいと思います。

一つ目は「挨拶」 小諸高校生は挨拶ができると言われます。皆さんはどうですか、自分が、相手が気持ちよくなる挨拶が出来ますか。これはけっこう難しいことです。だから世の中の人には「挨拶が出来る人」を望むのです。

二つ目は「正しい言葉遣い」 敬語が使えますか。面接の直前に身に着けようと思っても中々難しいものです。昨年度も三年生は苦労しました。

三つ目は「文章を読む力」 今、興味関心があることの専門書、専門家が書いた本を読んでください。もしかしたら、難しく途中で諦めてしまってもかまいません、とりあえず読んでみてください。読めなかったら、或いは理解できなかったら、またいつか読めばいいのです。本を読むことは、その人、著者・つまりその道の一流の人から、直接あなたに話をしてきているのと同じことなのです。

一流人なら、講演会にお招きしたら、一回の講演で何十万円もかかります。しかも、聞き直すことはできません。本を読むということはその一流人を独占して講演を聴くことと同じことなのです。

「声に出して読みたい日本語」の著者で有名な明治大学の齋藤孝教授は著書の中で「私は本を読むときに、その著者が自分ひとりに向かって直接語りかけてくれているように感じながら読むことにしている。高い才能を持った人間が、大変な努力をして勉強をし、ようやく到達した認識を、二人きりで自分に丁寧に話してくれるのだ。いくら高くても高すぎるということはない。現実にはそれが数百円なのだから話を聴かない手はない。

昔の日本の師弟関係のように、先生の話に正座して一人で弟子として聴かせてもらう。これは贅沢な時間だ。」(岩波新書「読書力」と書いています。

ありがたいことに、図書館があります。さっきも言いましたが、分からなくて途中で止めてもいいのです。勉強してまた後で読めばいいのです。とりあえず、はしから読んでみましょう。そして、これはと思う本に出合ったら、お小遣いで買きましょう。

何を読んだらいいか分からなかったら、皆さんに一番近い先生、本校の先生に訊いてください。そして、読んだ本の著者はもしかしたら、あなたの一生の先生になるかも知れません。

本年度も皆さんの活躍を期待しています。



【吹奏楽部：中日管楽器個人・重奏コンテスト本大会（三重県）、トランペット五重奏第2位・理事長賞、個人・オーボエ・トランペット金賞】